

カーダール評価の難しさ

－ハンガリー動乱 50 年：動乱を招いた暗黒時代（その 7）

盛田 常夫

首相府の諮問委員会である通称「ケネディ委員会」は、昨年 9 月 400 頁余の報告（首相府の HP からダウンロードできる）をまとめた。この委員会は、いわゆる旧体制時代の機密文書、とりわけ政治保安警察の諜報文書取扱いにかかわる歴代政府の施策を検討し、問題点を明らかにして、機密文書の公開に向けた法律策定を促すことを目的としたものだ。

現在、ハンガリーの機密文書の多くは 70 年間の機密指定になっており、旧体制の保安警察関係資料も研究者以外に閲覧することができない。また、研究者もすべての文書を閲覧できる訳ではない。旧社会主義国の多くの国では、依然として旧体制時代の機密文書管理法が効力をもっており、著しく長期にわたって国民の眼から公文書を隔離しているのが特徴である。体制転換によって旧体制の過ちを直していくことが必要なのに、すべての重要文書が隠されていたのでは歴史の評価を下すことも、そこから教訓を得ることもできない。有効な法律が策定できない背景には、与野党それぞれが抱える内部事情がある。しかし、公正な歴史評価を行うためには、これらの機密文書が適切に公開されなければならない。

ハンガリーに固有な問題

本コラムで連載していように、ハンガリー動乱勃発に至るまで、ハンガリーの保安警察は合法・非合法的な殺人を繰り返してきた。しかし、この動乱前の保安警察によるフレームアップが誰によって発案されどのように実行されたのかという指揮系統の全容や、その政治責任が完全に解明されていない。体制転換以後、歴史的評価に資する証言や書物は多く出版されているが、機密資料の重要な部分が 1956 年の動乱や 1989 年の体制転換の混乱に紛れて廃棄されたとも言われている。

ハンガリー動乱によって権力を獲得したカーダールは、その地位を固める過程で、ライク処刑事件以後、自らが関わってきた事件の資料や、1951 年に自らが逮捕され時に作成された自白書などの重要書類や証拠物を廃棄したと考えられる。ナジの処刑に拘ったのも、またラーコシをソ連から帰国させ処罰すべきという意見を無視して、ラーコシの帰還を許さなかったのも、ラーコシ時代の自らの役割が暴露され、権力維持を難しくするという政治判断からだったのだろう。

さらに、1989 年の体制転換においても、動乱以後の保安警察資料が廃棄されたと言われている。これは現社会党が平和的に政権を移行する過程で生じたことである。旧社会主義労働者党や新生社会党の一部の幹部たちは、秘密裏に旧体制時代における不都合な資料を秘密裏に廃棄したようだ。しかし、それでもなお、諜報部員のすべての資料を廃棄することは不可能で、研究者の長期にわたる分析から、現存の政治家や知識人・文化人で諜報部

員だった人物のコードネームが特定されている。

チェコスロバキアやポーランドのように、体制転換によって旧共産党にたいする厳しい眼が注がれた国とは異なり、旧体制の要人たちが体制転換以後も与党や野党の要人として公的舞台上に活動しているというハンガリー的な現象が、旧体制の機密文書を公開させる法律策定を難しくさせている。さらに与野党を問わず、政治家の両親あるいは縁者に保安警察の関係した者がいたり、その指導的地位にあたりし者がいることも、真相究明を難しくしている。

カーダールをどう評価するか

ハンガリーの歴史協議会は「ハンガリー史における評価が分かれる人物」というシリーズで講演会を行い、それを昨年、1冊の書物（*Magyar történelem vitatott személyiségei, Kossuth kiadó, 2008*）にまとめた。その書物の最後を占めているのが、カーダールである。「国を救った救世主か、それとも変動を生き抜いたしぶとい政治家か」という問いかけである。

通常、カーダールの統治は1956年から1988年の書記長退陣までの32年間とされるが、実際には戦後の共産党再建から幹部として党と政府の要職を占めてきたから、実に40年以上にわたって戦後ハンガリーの政治的指導者だったことになる。もっとも、ジュルチャーニイ首相夫人の祖父であるアプロー・アントルのように、粛清対象にならなかったために、カーダール以上の長期にわたって共産党政治局員を務めた政治家もいるが、アプローは一度として政権のトップに加わったことはなく、常に政治局員の末席を汚してきた政治家だ。それにたいして、カーダールは共産党の幹部として、常に党と政府の要職に就き、戦後のラーコシ独裁期を支えながら、1951年にはスパイ容疑で逮捕され、スターリンの死によって復権して党指導部に戻って再びラーコシ＝ゲルーと手を結び、その後のハンガリー動乱で党のトップに祭り上げられ、今度はそれを逆手に自らの権力を脅かす政治家を粛清し、その後に国民宥和の「柔らかな独裁体制」を敷くようになった人物である。

こういう経歴をもつ政治家を一言で評価することはできない。カーダールが肯定的に評価されるのは、動乱の処理が終わり、国民宥和を唱えた1962年以降の時期である。それ以前のカーダールは、ライク処刑とナジ処刑に直接手を下した人物として否定的な評価を受けよう。カーダールは1951年にスパイ容疑で逮捕されたことから、ラーコシ独裁の犠牲者として自らの描き、それまでの自らの汚れた役割を免罪したようだ。しかし、ラーコシに荷担してライクを処刑し、それ以後の共産党独裁（ラーコシ体制）確立に積極的に貢献しただけでなく、釈放以後にはラーコシ＝ゲルーに再び協力して、戦後のフレームアップの全責任をファルカシュに帰せ、ラーコシがソ連に亡命した後は、ゲルーと一緒に動乱が始まるまで行動を共にしていた。この歴史的過去は消し去ることはできない。本コラムで詳しく分析したように、ナジ処刑もまた、カーダール自身が決断したものである。

カーダール逮捕の背景

戦後世界が冷戦体制に入り、朝鮮戦争が勃発するなか、スターリンのソ連とその衛星国では、ソ連共産党の強引な主導によって、衛星国の共産党政府の締め付け政策が実行されるようになった。まさにライク外相処刑は中・東欧におけるスターリンのソ連共産党が主導する粛清の号砲であった。

その第一弾として、政府や共産党に加わった旧社会民主党系の幹部が粛清の目標に設定された。あること、ないことを繋ぎ合わせて、粛清の理由がでっち上げられ、抹殺するという恐怖政治が始まった。ライク処刑や社会民主党幹部処刑において、カーダールは政治局員および内務大臣として重要な役割を担った。とくにライク自白調書はカーダールによる尋問によって作成され、ライク自身も処刑までのあいだにラーコシ宛てた上申書において、「カーダールの説得に応じて自白したが、まったくの濡れ衣である」と記したと言われる（「ライク上申書」はすでに廃棄されている）。

それ続く第二弾は、保安警察内部の粛清である。それが前回に記したスーチ兄弟の虐殺である。共産党による粛清劇の初めから積極的に関与し、保安警察の裏の裏まで知るスーチを消すという決断は、スターリンあるいはそれを代弁するベリヤの指示にもとづいてラーコシが実行したとしか考えようがない。

1949年秋のライク処刑から1950年末にかけて、社会民主党出身のサカシッチ最高幹部会議長の逮捕（1950年4月）、リース法務大臣の虐殺（1950年9月）、保安警察幹部のスーチ兄弟の虐殺（1950年10月）が続いた。この粛清の連鎖のなかで、粛清の目標は次第に共産党内部に移っていった。スターリンやその側近からの催促なしでは考えられないことだが、ラーコシはスターリンの歓心を買うために、積極的に粛清路線を歩んだと考えられる。

戦後の共産党を再建したラーコシ、ゲルー、レーヴァイ、ファルカシュの4人組は皆ユダヤ人で、ソ連帰りであった。ゲルーは経済担当、レーヴァイは文化・イデオロギー担当、ファルカシュは内務担当で、粛清関連の指令はラーコシからファルカシュ、あるいはラーコシからラーコシの盟友で保安警察長官ピーテル・ガーボルのラインで実行に移された。レーヴァイはラーコシと度々激しく議論する様子が伝えられており、ラーコシの側近たちはレーヴァイが粛清の標的になるのではないかと考えたようだが、この4人組は粛清対象外であった。4人組に続く共産党幹部はソ連亡命歴のない国内派のカーダールであった。スターリンの指示にもとづき、ラーコシは「共産党内部の敵」として、カーダールを祭り上げる意志を固めた。

隣国チェコスロバキアでは、やはりソ連共産党の指示のもと、スランスキー共産党書記長を標的にした粛清劇が始まろうとしていた。1951年の年明けから、ハンガリーとチェコスロバキアでは、共産党の最高幹部を標的にした粛清事件が着々と準備されていた。

カーダールの弱み

スランスキー事件やサカシッチ事件でも肅清の名目は、戦前の非合法活動における「共産党への裏切り」である。戦前のファシズム政権との闘いにおいて、さまざまな政治的潮流や権力との関係で非常に錯綜した状況が生まれていたことは、容易に想像できる。スペイン内戦に加わりながらソ連共産党の指示に従わなかった者、国内の政治警察の取り調べを受けて、簡単に釈放された者などの履歴が洗われ、それらがすべて「敵への寝返り」や「スパイへの転落」に仕立て上げられたのである。

カーダールの戦前の経歴が洗われ、二つの弱点が発見された。一つは、ファシズム政権の追求から逃れるために、1943年に共産党の解党が議論された時に、解党を積極的に唱えた張本人だという事実である。今一つは、逮捕歴があり、指紋が採取されているにもかかわらず、重罪が想定された終戦直前の逃亡兵容疑の再逮捕事件で簡単に釈放されたことである。ラーコシは声高に、「スパイである以外に、このようなことは考えられない」と断言し、カーダールの逮捕を指示したのである。

1951年4月21日。薔薇が丘の自宅で昼食を終え党本部へ向かうカーダールの車は途中で、保安警察長官ピーテル・ガーボルが乗る車に止められた。ピーテルはカーダールに逮捕を告げて拘束し、同時に逮捕した同じく政治局員のカーライ・ジュラとともに、12区のヴィラニョシュ通りに保安警察が所有していた秘密の館に監禁された。

カーダール逮捕に至る前に、国内派の古参共産党幹部の逮捕が続いていた。1950年から1951年にかけて、ラーコシの盟友で古参党员として知られるドナート・フェレンツ等が、1944年の共産党再結成に反対したという理由で逮捕されていたから、カーダールは自らの立場が安泰なものではないことは感じていたはずである。実は、カーダール逮捕前日の20日にも、非常に残酷な事件が起きていた。

共産党政治局員で内務大臣を務めていたゾリュド・シャンドールが、ベンツール通りにある自宅の館で、二人の子供、妻と母を猟銃で殺し、自らも自殺した。午前の政治局員会議でラーコシが内務省の仕事ぶりを激しく批判し席を立ったのを受け、ゾリュドは辞表を提出し、その足で家に戻って一家心中を図った。遺書が残されており、ピーテル・ガーボルは現場の電話で遺書の一部をラーコシに伝えた。「こういう状況の中では、もう生きていく意味はない」という内容だったと言われる。ピーテル・ガーボルがこの遺書をラーコシに届けた際に、ラーコシはピーテルの動揺を叱責し、この件について箝口令を敷いた。さらに、ラーコシは幹部会でゾリュドを「敵だった」と決めつけたが、この事件にかかわる調査はいっさい行われなかった。

さて、カーダール尋問の指揮をとったのは、四人組の一人のファルカシュ・ミハーイであり、ファルカシュは息子のヴラジミールを保安警察内の尋問チームのリーダーに指名した。保安警察内でファルカシュが尋問の陣頭指揮に立つのはこれが初めてで、息子のヴラジミールが尋問の責任者になったのもこれが最初だった。ヴラジミールはまだ26歳にも満たない若者であった。戦前の共産党の歴史も知らない弱輩がカーダールの尋問指揮にあたったことは、カーダールの自尊心を非常に傷つけた。もちろん、カーダールは逮捕の指示

がどこから来ているかは承知していたであろうが、尋問の先頭に立ったファルカシュ・ミハイ父子はカーダールの逆恨みを買うことになった。後にハンガリーのスターリン主義時代の清算を行う際に、ラーコシ＝ゲルーが自らの責任を逃れるために作った「すべてのフレームアップの首謀者はファルカシュ父子」という筋書きを、カーダールも自らの政治生命の延命のために積極的に利用することになる。

他方、カーダール逮捕に決定的な情報をラーコシに提供し、カーダール逮捕の先頭に立ったピーテル・ガーボルは、自白書を撤回したカーダールを説得して、再び自白書に署名させた。カーダールがライクを自白させたように。二人の間でどのような会話が交わされたのか分からないが、自白書提出以後もカーダールはレストランから配送された食事を与えられる等の待遇を受け続けた。当時の尋問において、「カーダールは爪はがしの拷問を受けた」というのは、動乱以後のカーダールを英雄に仕立てるための作り話で、カーダールだけは特別待遇を受けていた。後になってピーテル・ガーボルは、「死刑を要求したラーコシからカーダールの命を救った恩人」という役割を強調することで、動乱以後のカーダール政権下での生き残りに賭けるのである。

もちろん、カーダールが処刑されなかったのは、ピーテル・ガーボルの助力によるものではなく、ソ連共産党政治局の賛同を得ることができなかったからと考えられる。実際、ハンガリーを訪問した政治局員のヴォロシロフが、「カーダールは本当に敵なのか」とピーテルに尋ねたという。ソ連共産党が逮捕に疑念をもっている人物を、ラーコシの一存で処刑することはできなかったのだ。(関連記事は、<http://morita.tateyama.hu> を参照されたい)